

平成30年度第1回御前崎市総合教育会議

日 時 平成30年9月18日(火)
午後1時30分～3時05分
会 場 御前崎市役所 301会議室

次 第

- 1 開 会
- 2 市長あいさつ
- 3 教育長あいさつ
- 4 協 議
 - (1) 幼児教育の重要性
(幼児教育が将来に与える影響)
 - (2) 平成30年度全国学力学習状況調査について
- 5 閉 会

御前崎市総合教育会議委員

職 名	氏 名	備 考
市 長	柳 澤 重 夫	
副 市 長	鴨 川 朗	
教 育 長	河 原 崎 全	
教 育 委 員	吉 村 勝	
教 育 委 員	下 村 勝	
教 育 委 員	竹 田 和 世	
教 育 委 員	島 田 恵 美	

事 務 局

職 名	氏 名	備 考
総 務 部 長	増 田 正 行	
経 営 戦 略 監	宮 崎 隆 昭	
健康福祉部長	大 倉 勝 美	
教 育 部 長	長 尾 智 生	
総 務 課 長	鈴 木 雅 美	
学校教育課長	長 谷 川 延 明	
社会教育課長	鈴 木 弘 康	
教育総務課長	高 田 和 幸	
教育総務課 課 長 補 佐	河 原 崎 聡 信	

1 開 会

○司会 それでは、定刻になりましたので、始めさせていただきたいと思います。

最初に、互礼を交わしたいと思いますので、お願いします。

(起 立)

○司会 相互に礼。

(相互に礼)

○司会 よろしく申し上げます。ご着席ください。

本日は、皆さん大変お忙しいところを平成30年度第1回御前崎市総合教育会議にご出席をいただきまして、本当にありがとうございます。早速始めさせていただきたいと思います。

2 市長あいさつ

○司会 最初に、市長よりご挨拶をお願いします。

○市長（柳澤重夫） 皆さん、こんにちは。ここ3日ほど青空が広がりまして、代わりに大変暑い日が続いておりますが、それでも彼岸の入りを前に朝夕は大変過ごしやすくなりました。庭の柿の実も色づき始めまして、少しずつ秋の気配が感じられるようになりました。また、今日は御前崎市の第1回目となります総合教育会議に、吉村先生を初め、教育委員の皆さんには本当にお忙しい中お時間いただきまして、誠にありがとうございます。

また、日ごろから教育委員の皆さんには幼稚園、小学校、中学校、高校のスクラム教育に対しまして格段のご尽力、またご協力いただいておりますことを心から感謝申し上げます。お話を聞きますと、大変教育現場で子供たちも落ちついた授業をされているということで、本当にうれしく思っております。そういった中で、これも教育委員さんの日ごろの努力のおかげだと思っております。また、今後さらにこの御前崎市の教育が近隣にないようなすばらしい教育の実績を上げられますように、また皆さんには格段のご尽力を願いたいなと思っております。

今日は皆さんからいろんなお話をいただきまして、御前崎のこの「スクラム御前崎」の教育にさらに肉づけをしていただけるような、有意義な会議であることを心から期待を申し上げまして、一言冒頭の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

3 教育長あいさつ

○司会 続きまして、教育長よりご挨拶をいたします。

○教育長（河原崎 全） 改めまして、皆様こんにちは。いつもお世話になっております。今日は9月18日ですけれども、2学期が始まって約3週間が経とうとしております。おかげさまで夏休み後、2学期のスタート、市内の小中学校、大きなトラブル等もなく、順調に学校生活ができているということで、校長から報告を受けております。

今日は第1回の総合教育会議ということで、2つの議題を考えさせていただきました。1つ目については、御前崎市にとってのというよりも、これはもう県全体、国全体、どこから見ても大きな問題といえますか、考えていかななくてはいけないことなのかなと思っています。先ほども市長のお話でいけば、幼稚園から高校までのスクラム教育の一番基となる部分ですので、このあたり当市としてもどういうふうに考えていったらいいのか。また、教育委員会部局だけではなくて、こちらについては福祉関係の部も関わることでございますので、その辺の中でどういうふうに関係づけていったらいいかということもまた一つの考えるべきことなのかなと思っています。

2つ目の学力学習状況調査につきましては、なかなか当市の場合にはっきり言って芳しくないという結果が出ておりますので、そのあたり現在対策を練って実行しているところでございますが、また今日の会議の中で教育委員の皆様方からもご意見を頂戴できればと思います。

市長さんと教育委員さんを一堂に会しての会合というのは、大変貴重な場であると思います。今日皆様からいただいた意見を施策にまた活かしていくような形をとっていきたいと思いますので、忌憚のないご意見をよろしくをお願いをしたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

4 協議

(1) 幼児教育の重要性

(幼児教育が将来に与える影響)

○司会 それでは、早速4番の協議に入らせていただきたいと思いますけれども、1点目でございますけれども、幼児教育の重要性（幼児教育が将来に与える影響）ということで協議内容をそこに記載してありますけれども、まずは市長が思う幼児教育の重要性、教育観ですか、そういったものを語っていただきますので、その後で皆さんに忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

それでは、市長、よろしくお願いします。

○市長（柳澤重夫） 先ほど申し上げましたように、教育委員の皆さん初め、御前崎市としては小学校、中学校の教育には、先生方も本当に熱心に取り組んでくださって、心から感謝申し上げたいと思います。そういった中で、その課程を踏む以前に幼児教育はどのような教育をされているのか、私が現場に今余り行きませんので、はっきりわからないわけですが、そういった中で幼児教育が将来の人間性形成でありますとか、そういったものに与える影響、こういったものを少し掘り下げて考えてみてはどうかと思っています。

といいますのも、昨年私もこの席で申し上げた記憶がありますが、アメリカのノーベル学者のジェームズ・ヘックマンという方が、40年間にわたって幼児教育を追跡調査した。その結果、その40年間の後にはその青年、子供たちが優位な成績で、そういった優位性が認められたという、こういった調査結果もまとまっておりますので、それが全てではないかもしれませんが、そういった幼児教育に与えるその現場の教育、こういったものをどんなふうにしていけるような、またしていったほうがいいのか、こういったことも1つの課題というふうに思いました。

とにかく幼児教育をやったときに集中力でありますとか、そういった考える力、それが後の学習意欲にもつながるということもあろうかと思っておりますので、そういったことも含めて幼児教育の中でこれを取り上げたらいいのではないかと、ああいったことをやったらいいのではないかと、そんなことも先生方にご意見を伺いながら、そうなりますともう就学してからの教育も比較的楽になるのではないかと思います。

そういった中で、とにかく幼児教育というのは家庭教育がある程度主になってくると思うのです。ですので、家庭教育も家庭でできないような、お母様が働いておりますので、そういったものを補う、また同時に学習意欲ももちろんそうありますが、将来にわたる人間性、こういったものの形成、そういったことも幼児教育の中では大変重要ではないかと思っております。個性尊重といいますますが、個性が全ていい個性ばかりではありませんので、修正すべき個性は早いうちにいい方向に向けてやると、こういったことも教育現場でやらなくてはならないかなと思っております。ご両親が当然やるべきことでありますが、それは家庭ではなかなかできないのもありますので、そういった個性、いい個性もある、悪い個性もある、それは修正すべき、こういったことも含めて、幼児教育についてはちょっと私も重要な部分ではないかなと思っておりますので、そういったことも少し皆さんからご意見をいただければありがたいなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

それでは、ここからは今市長が、幼児教育が将来人間形成、将来に与える影響と、そういったことで重要というようにお話ありました。また、家庭教育がなかなか家庭でできない中で、それを教育現場でどういうふうに補っていくかということをお話しされましたけれども、ここからはフリートークで皆様活発なご意見をいただければと思いますので、お願いします。

ご意見ありますか。

それでは、園の現場で働いた経験があります島田委員さん、もし現場での経験を生かしてご意見がありましたら、いかがでしょうか。

○教育委員（島田恵美） 市長のお話にもありましたが、昔と違って今というのは環境が大分変わっていて、少子化ということと核家族ということに当たって、昔は近所で集まってみんなで遊んだりという環境だったと思うのですけれども、それも今はなくなって、インターネットやゲームなど室内で1人でやるという環境も狭まってきていると思うのですけれども、本当に子供たちにとって大事なことのひとつの環境とか、人間関係というのは、昔は自然に身につけていたと思うのですけれども、今は本当に共働きということもあって、家庭ではなかなか難しくなっているのではないかなと思います。そういうところをやっぱ幼稚園や保育園などで補えるところは大事な役割ではないかなと思います。

今はお母さんたちもすごく年齢も若くて、子育てに悩んでいる方がすごく多いのですけれども、私が勤めているときもそうだったのですけれども、何を質問していいかわからないって。何でも聞いてねと先生方が言っても、何を質問していいかわからないから、困っていないですとかってなってしまう方もいたりしたのですけれども、そういうお母さんたちを助ける役割ということでは、園の先生たちに相談できるという環境も大事にしてほしいなと思います。

この前ちょっと自分の娘に、高校へ行ってちょっと話を聞いたのですけれども、高校の大学受験のほうでも自発的とか判断力、知恵というのが今度の新しい大学入試で変わるということで、とても大事になってくるって。勉強だけではだめなのだよということで、ちょっと話を聞いたものですから、そういうのはやっぱり掘り下げて幼児期からも言われていることと同じだなと、すごく感じました。

○司会 ありがとうございます。

そのほかどうでしょうか。

○教育委員（竹田和世） 実は自分の仕事の関係もあって、この間大阪大学の教授の話を聞く機会がありまして、幼児教育のお話だったのですけれども、要するにその認知能力と非認知能力をバランスよくつけていかなくてはいけないというお話だったのですけれども、そのIQで示される計算力であるとか言語能力であるとか、それはそれで大事ですけれども、その協調性であるとか規範意識であるとか、そういった精神の、今の子って割と切れる子が多いようなのですけれども、その精神の安定性とか、そういった非認知能力というのをもうちょっとフォーカスしていかないといけないのではないかということをお話しされて、ああ、なるほどというか、そんなふうに思いました。

私仕事をしていて、幼児さん、11月に小学校に説明会がありますよね。そのころを境にお母さんたちが急に小学生になるのだという意識を強く持つようになっていって、そのとき慌てて来た男の子がいたのですけれども、年長さんです。11月の時期に全く平仮名も読めないというお話で来たのですけれども、幼稚園の先生にお話をしたら、自分のものと他人のものが区別できないといけないから、まずは自分の名前が読めるようにしておけばいいですよと、そういうお返事だったって。でも、ふと周りを見たら、みんな読めて書いていましたみたいな。うちの子男の子で、すごく活発に遊ぶ子だから、何かそんなことを今まで思ってもみななかったけれども、ふと気がついて周りを見たら、もうそうでしたって言われたのですけれども、学校教育の流れの中でその子がちょうどであれば、うまく吸収できていけば、それはそれで何の問題もないと思うのです。だけれども、そうでないとしたら、一斉授業を受けたときに、入ったときからやっぱ小1プロブレムというか、そういう中に入ってしまうお子さんもいるのではないのかなということをちょっと思いました。

2016年の9月にその幼稚園教育要領が改訂されたということを新聞に載っていて、ちょっと興味深く

見たのですけれども、その中でも結局そういう非認知能力と、また今度は認知能力のほうで数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚とかって、言葉による伝え合いとかということを書かれていたのですけれども、やっぱり両方の面をうまくバランスよくさせていかないと、幼児教育って本当に難しいのではないかなと、そんなふうに思いました。

希望なのですけれども、小学校の先生って異動があるではないですか。だから、私の思っていることって無理なのかなとも思ったのですけれども、もしもその来年度低学年、1年生を受け持つよという先生がもしも一人でもその学校で決まっていたとしたら、その先生と幼稚園の先生たちとが何かうまくコミュニケーションがとれるような話し合いの機会を持てるようなそんな場面をつくっていただけるといいかなと。でも、先生たち異動があるから、そういうのは難しいかなって、何か自分の中で問いたり、答えを出したりみたいな、そんな感じだったのですけれども、何となくそんなことを思いました。

その認知能力、非認知能力のときに、将来的なリターンが大きいのは非認知能力なのだそうです。認知能力の高い子は、学歴もついていったりして、将来的に賃金を稼げる、そういう面では上のほうに行くらしいのですけれども、でも本当に素直に将来的なリターンがあるのは、やっぱり非認知能力の高い子だっていうことも言われていました。でも、ちゃんとアスタリスクがついていて、でももちろん環境によってリターンの大きさは変わります。結局、家庭環境なのかなということも思いました。

だから、小学校の先生と幼稚園の先生との交流みたいなのがうまくあって、学校に来るまでにこんなことをみたいなのを少しちょっと具体的に言うてくださったりとかすると、ちょっとは違うのかなみたいなことも感じました。

○司会　ありがとうございます。

今お二人のご意見いただきましたけれども、どうでしょうか。

先生、どうですか。

○教育委員（吉村　勝）　今お話聞いていて、もっともだなというようなことがありました。やっぱり何でもそうなのだけれども、特によく言われる陸上競技なんか、短距離なんかはスタートで失敗した、スタートで出遅れたというようなことを時々聞くのですが、やっぱり幼児というのは人生のスタートでありますよね。そういうことを考えると、やっぱりこの時期がいかに大事かと。それで、そこで一番大事になってくるのが、今竹田さんが言われたようなことだと思いますので、IQの伸びを求めるのは幅が小さいけれども、非認知能力というのはその環境によって随分変わってくるという、そういうことがよく言われています。だから、非認知能力が伸びていく人は、やはり社会に出てから成功する人が多いという、そういうようなことも言われています。それはもう追跡調査で実証されていることなのです。

だから、そのスタートの時点でそういう非認知能力を含めた指導をどういうふうにしていくかということがとても大事なことだろうなと思っています。

その一番のスタートのときの第1の教育者は、両親でありますので、その環境が大きく影響してくるのではないかなということが1つあります。

それからもう一つは、やっぱり保育園、幼稚園の教育の方針といいますか、私たちの立場でいえば、その辺をいかに教育委員会がリードしながら指導していったらやるかという。それから、行政としてもやっぱりそこにかかわってくる。今日本当にたくさんの方がこの会議に出てくれて、とてもうれしいなと思っています。昨年も総務課の人たちはいろいろ出てくれて、よかったなと思いますけれども、それに輪をかけて今年は出てくれて、それだけ市の執行部が子供の将来を考えていてくれるのかなということを感じました。

そういうことで、幼稚園教育とか保育園の中にも指導要領というのがあるわけです。そういうことを考えていくと、教育委員会が今やっている「早寝早起き朝ご飯」とスクラムという、これもやっぱり規則正しい生活をさせようということで、それが子供たちの自主性とか、あるいは忍耐力とか、そういうものにつながっていくはずだと。それが基盤になっていけば、学力の問題も解決はしないです。

ようが、少しはプラスになっていくだろうし、それから人としての育ちの基礎の部分ができるようになっていくことを期待しているところです。

もう一つつけ加えさせていただくと、昨年園長先生方と月に1回いろいろ、市内の園長先生方と話をする会があって、9回ぐらい出させてもらったのですが、僕が言い続けたことは、1つは人間関係づくりをぜひ覚えさせてくださいということ。これは非認知能力なのだけれども、要するにこれが不登校の問題につながっていくというか、市内の小中学生、特に中学生はちょっと不登校が多かったものですから、そこを解決するにはやっぱりその人間性、人とのつながりができるような、そういう子供を育てたいということが1つと。

それから、園長先生にお願いしたのは、保育とかそういうことも大事なだけれども、ぜひ園の経営ということを考えていただきたいということをずっと言ってきたのです。ただ、子供を安全に1日預かってやっていけばいいということではなくて、やっぱりそこには教育というものがあって、その教育を保育士に理解してもらって、やっぱり子供と接する中で意図的にそういう教育ができていくようなところが、主体性とか工夫をさせるだとか、できた喜びを分かち合うとか、あるいは認めてやるだとか、そういうようなことをやってくださいねということをずっとお願いをしてきたのですが、そういう中で園長先生も3月のころには、やっぱり園の経営とか、そういう感覚が出てきているかなということを思いました。これは指導員の櫻井先生も随分そういう面でいえばご努力をしてくださったおかげかなということを思った次第です。

感想みたいになってしまったのですが、そんなところで。

○司会 今園の教育方針というような、そういったことがありましたけれども、お手元にカラー刷りの資料、乳幼児教育のグランドデザインというのですか、体系図がここに書いてありまして、御前崎市のどういうふうに乳幼児教育をやっていくかと、そういったような資料がありますので、こちらも見ながらまたご意見いただければと思いますので、よろしくお願いします。

○市長（柳澤重夫） 今島田さんと竹田さんと吉村先生から話があったわけですが、おっしゃるとおりなのですね。子供たちのお母さんたちも悩んでいる。それをフォローしてやらないと、子育て中のお母さんと子供が1歳になるまでのお母さんの自殺がものすごく多いらしいです。結局子育てで悩んで亡くなると思うのですけれども、そういったことも何かわからないときにはそういった心の悩みとか、そういったものもあるのだから。そういった中で竹田さんが言ったこの認知能力が幼児教育のときに高ければ優位な差が出るということがジェームズ・ヘックマンの調査に書いてあるので、それは実践できればしたほうが良いと思いますが、そういったことも一つだなと思います。

いずれにしても、人生80年の中で25%くらいですかね、教育の期間は、大学まで行くと25%。人生80年の中であと75%は社会人として生きていかなくてはならぬ。この75%を生き抜くためには、どういう25%の教育をすべきかということが教育の目的ではないかと思うのです。社会人として生きていくための人間づくりの場が、その営みが教育だと思うのです。ですので、それをただ学力だけ上げれば良いというものでもないし、どういうふうにそういった社会で生きていくための豊かな心というか、人間性といいますか、そういった創造性といいますか、忍耐力といいますか、そういったものを併せて教育の場で育てていく。そして、社会に出していくと。こういう営みが教育であると思いますので、そういったことを含めると、結構幼稚園から高校まで、また大学まで本当にそういった人間を育てるための教育といいますか、いつか言ったかと思いますが、ドイツの哲学者カントが、人は教育によって人間になるということですが、教育がなされなければ人間にはならないということでもありますので、そういったことも含めて教育の大切さというのをわかっていますが、実際難しいと思うのです。先生方のご苦勞もわかりますが、御前崎市としてこういう学校教育を通じて御前崎の教育がこういった人間をつくりたいのだという、そういったものを実学といいますか、実学ということも言われていますので、その実学のためにはとにかくそんなことが大切だなと、私はそんなふうに思っているのです。

○司会 それでは、先ほど、それこそ吉村先生から、行政も出ていただいたというようなお話があり

ましたので、最初に乳幼児教育というか、子供のところの一番関連する健康福祉部長から、では大倉さんからお願いします。

○健康福祉部長（大倉勝美） 私からは、現状をちょっとお話しさせてもらいたいと思います。

ネグレクトといいますか、育児の問題が非常に多くあります。やはりお母さんが朝食を作らない、起きられない。必然的にこの数字にもありましたけれども、朝御飯抜きで学校へ行くということ、そういうケースは非常に多くなっております。うちのほうとしても、ただ多くなっているのを見過ごしているわけにはいきませんので、家庭相談員を配置しまして、2名ですけれども、それこそ市長が言われた子育ての相談を受けているわけですから、やはり家庭での教育といいますか、お母さん、お父さんを含めた教育が、今後ますます必要になってきて、子供だけではどうしてもできませんので、まずはその辺の普通と言ったら語弊がありますが、人並みに朝御飯を食べて、朝早く起きて御飯を食べて学校へ行くと、このような本当の我々からいうと普通のような習慣ですけれども、それができていない家庭が非常に多くなっていますので、その辺を気をつけて今後は家庭児童相談員にもよくお話をし、そのことからまずはなくしていこうかなというふうに現状考えております。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

今現状を大倉部長から話がありましたけれども、朝御飯のアンケートもとった中で、学年によってとらないところがあったのです。顕著に表れているところがある。小5、中2でしたっけ。そういったところは、今言った家庭環境のそういった問題のある方が多いのかなと思います。同じ学年がそういう影響があるということだったので、そういったことがあるのかなと思いますけれども。

○教育委員（島田恵美） スクラムは市民の方たちも浸透してきているなとすごく感じるのですけれども、「早寝早起き朝ご飯」というのを言葉にして打ち出してくれてあって、いろんなどこを見ても張ってあったりとか、私なんかやってみても、ではそれが大事だといったら、早寝早起きで朝御飯をしっかり食べさせていこうとか思うのですけれども、その中で全部できるわけでもないの、うちは早起きがちょっと苦手で、そういう大変なのだけれども、親自身がそういうことで意識を持てるというのは、このスクラムの浸透してきている証拠かなとか、いいことかなと思います。

あいさつ運動なんかも、前は本当に市役所の職員の方とPTAの役員の人たちだけという感じだったのですけれども、今はもう地域のみなを巻き込んでやっているというのは、すごいやり始めて効果が少しずつですけれども、出てきているのではないかなと思っているのですけれども、今のお話を聞いて、何か切ない気持ちになります。

○教育委員（竹田和世） 先日、スクラムカレンダーの作成ボランティアで、私も東小学校でそのボランティアの仲間に出してもらっているの、出席したのですけれども、やっぱりそこでも「早寝早起き朝ご飯」をスローガンとしてすり込んでいるよと、掲げているよといういろんな小学校があったのですけれども、だからあっちこちの団体で、そういう声がうんと上がってくると、とてもいいなっています。

○司会 ほかはどうなのでしょう。

総務部長、一言何かありませんか。

○総務部長（増田正行） 私に幼児教育の重要性というのはなかなか語ることができないのですが、ただ今やはり先ほど来出ている社会に出てどうやって通用させる人を育てるのかという、そういう話の中で、やっぱり役所に入ってくる職員を見ても、何か画一的な人間形成がされているというか、余り個が個を突出しないというか、何か型にはまっているような。そういうものというのは、やはり今までのそういった幼児教育からの経過がどうしてもその課題を解決したりとか、いろんな中で培っているものが少ないのかなというふうな気がしています。

そういう中で、やはりもう少し大事な時期にちゃんとしたことを教えて伸ばしていくというようなことがやっぱり必要なのかなと思っています。こういった場でそういうお話をするのがいいかどうかちょっとわからないのですが、それを受けるやはり幼稚園の先生であったり、保育士、こういった

職のものは今、市とすると、年齢的なピラミッドが少し崩れてきておりまして、実は今これで退職をされる方が抜けてしまうと、ほとんど10年ぐらいう年齢的に先生方がいないような今構成になっているのです。ですので、当然そういった先生方が子供たちを支えているという分野でも、今後市の課題としてそういった市と人事的なものであったりとか、教育委員会としてどういうふうにやっていくか。当然10年間ぐらい空白が出てしまって、もう四十ちょっとの人たちが園長クラスになってくるといふ、こういった現実も少し知っていただきたいというのはあります。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

今市役所の職員の状況のお話がありましたけれども、県から来ている戦略監、何かあったら。

○経営戦略監（宮崎隆昭） 私、菊川で子育てをずっとしてきました。幼稚園、小学校、中学校とPTA活動もやってきまして、教育にはある程度かかわってきたのかなと思います。

菊川の場合ですと、民間さんが特色ある幼稚園、保育園をやっている、あと私立でも中央さんが特色ある幼稚園をやっています。どちらかというと、遊ばせて伸び伸び育てたいよということが民間の堀之内さんに行ったり、意外と楽器演奏等、ちょっと集団行動がしっかりできるようになりたいよという中央さんを選ぶという、いろんな多様性を持った教育環境が実は民間が入ることによって各園でできていたのかなと思います。

多分自分の子供をどうやって育てたいかと考えたときに、やっぱり親ってそれぞれの部分があって、その多様性にえられるような幼児教育の場を提供できる環境がこれから整っていくといいのだろうなと思っています。

その中でも先ほど来から話をしています規則正しい生活とかというのは根幹であって、そこはしっかり守った上でいろんな形で非認知能力といったところの話があったのですが、その子の個性がありますので、どこで分野で伸びていくのだろうなというのをある程度はいろんな選択肢でカバーできる仕組みが今後必要かなと思っています。それがこれから子供が育っていく中の多様性に対応できるような教育なのかなと思っています。

ただ、繰り返しますが、規則正しい生活という根幹の部分だけはしっかりと共通的にスクラムの中で取り組んでいただければいいかなと。なおかつ、先ほど教育長からも話が出ましたが、夏休み明けというのはいろいろ夏休み中に問題があって、新学期が始まるときに不登校になったり、またほかの問題が生じたりということで非常に厳しい時期。それを考えますと、幼稚園から小学校へ上がる段階、ここの部分もある意味夏休み明けで新しいところに行く段階のステップでどうしてもこぼれてしまうというところがありますので、先ほど話がありました幼稚園の先生と小学校の先生が相互に交流し合う機会みたいなものが多数あって、幼稚園の子供も小学校を上がる前に学校体験を何回かできるような機会があることによって、スムーズな移行がいくのかなと思っています。

最後ですが、私が個人的に子供を育ててきたときには、やっぱり大変なのですけれども、親が子供とかかわる時間を長くしないと、子供はやっぱり育っていかないのかなと。逆に親がついてこない子供さんが中にいたとき、非常にかわいそうなのですが、そこは地域でカバーするというのですか、その子供も一緒にやろうよと、遊ぼうよと親が声をかけてくれるような親同士のつながりというのも非常に大切になりますので、親のコミュニケーションをどうやってとっていくのかというところ。ここは幼児教育の中で非常に重要なポイントなのかなと思います。

○司会 あとはどうですか。

○総務課長（鈴木雅美） 社会へ出て、市長先ほど言われましたように、75%は社会人になって、その根幹が一番のスタートが幼児教育ということで、自分も子供もいなくて、言える立場でもないのですが、社会に出て一番苦労するとか、気を遣うのが、やっぱり人間関係とか、そういうのが一番今の立場でいうと、少しそういうナーバスになってしまうといったような事例も結構見受けられるのです。そういったことを少し遊び込むことで、人の痛みがわかるとか、そういった人間がたくさんいてくれるといいなと。お互いに気を遣うことができる気遣い、非認知能力というのでしょうか、

その辺も伸ばしていく人材というか、そういうのを育てていくことが大切なのかなと感じます。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

副市長。

○副市長（鴨川 朗） 特にこの地域がひとり親が多いというのも一つの要因かなと思うのですけれども、何か家庭の力が弱まっています。先ほど来話があったように、家でどう子供を育てていくかというのは、非常に大きいと思います。本当に私、昔児童福祉をやっていたときに、児童相談所の方から言われたのですけれども、ゼロ歳児を保育園で預かっていましたけれども、本当はお母さんが1歳まで見た方がいいよと児童相談所の方は言っていました。それはずっと私の頭から離れないのですけれども、だからそれぐらいお母さんがというのは語弊があるかもしれませんが、1歳ぐらいまでは親が見たほうが良いということをずっと覚えています。それぐらい子供と接する時間を大切にしていって、家庭、よく子育て力が高まればいろんな意味で力がつくのではないかと思います。

先ほど健康福祉部長から話が出ましたように、ネグレクトとか、そういったものがやっぱり親の環境、親自身の環境が影響していたりとか、そういうようなケースも多いと聞いていますので、そういったスタートの時点から非常に大きいなと思います。

タウンミーティングで教育長が話されているのですけれども、遊び込む子と、資料にもありますけれども、やっぱりこういった友達とか、本当に遊び込む子供が大事なと思います。それがコミュニケーション力や社会性であったり、そういったものにつながっていくなと思っています。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

ほかは皆さんいいですか。

○市長（柳澤重夫） 今遊び込む子と言ったけれども、本当に子供というのは遊びが成長するための肥やしだよ、肥やし。肥料の肥やしと同じ、言葉は悪いけれども、遊びというのは成長するための肥やしだと思っています。そういった中で、昔から遊ばない子は危ない、遊べない子も危ないという。だから、子供にとっては遊びというのは、本当に重要なことだと思う。だから、今遊ぶ環境がないのだよね、子供たちが。でしたら、せめて幼稚園、保育園でそういった遊びを、今言ったようにやらせてやって、その中でさっき言ったような非認知能力とか、そういったものを取り入れていくことができればベターだと思うのです。

今副市長が言った1歳まではお母さんが育てると言ったけれども、本当に今ゼロ歳から保育園に入れる人もあると思う。だけれども、せめて1歳ぐらいまでは母親の胸で、胸の鼓動というか、そういったものを感じた子って全然違うのだってね。大きくなってから。そういったこともあるので、場合によっては1歳までは家庭でお母さんが見てくださいよ、僕もその代わり町で1歳までに見られたら多少補助してもいいですよというようなことを、昔ちょっと考えたことがあって。そういう大事なときだし。

なので、いろいろ考えられるもの全て一気に開拓するわけいかないのだよね。だけれども、大事なことのだから、みんなで何とか一番良い方法で考えていかないなと。

○司会 今この幼児教育の重要性というところの1番目の協議について、皆さんからご意見いただきましたけれども、教育長が総括してお願いします。

○教育長（河原崎 全） この話の最初からもう非認知能力のお話が出てきたというのは、本当にここ数年この言葉が注目されているものですから、ありがたいなと思いました。

ただ、非認知能力というと、余り聞きなれていないという方も中にはいらっしゃるかもしれませんが、具体的には今皆さんからお話出たように、要は遊ぶ、幼稚園の砂場でとか、野原でとか、そういうことなのですね。今やっていることをちょっと難しい意味や言葉で言えば非認知能力となると思うのですが、それは遊びの中で物事を最後までやり遂げるとか、友達と環境をつくっていくとか、そういうことなのですから、私たちが子供のころにごく普通にやっていたことなのだろうなと思い

ます。

ただ、そういう中で今の状況は、何人かの方からお話がありましたように、なかなか今社会全体がそういう環境にないものですから、行政でそういう場を考えていかざるを得ないといったところがあると思います。

今もお話がありましたが、本当は親御さんが3歳ぐらいまではご家庭で一緒にいるのがいいと思うのですけれども、やっぱり経済的な問題であったり、あと女性の方の社会進出ということがあったりして、そちらの方面からいうとやっぱり子供さんを預かる場所がないと、ということがあるものですから、いたし方ない面もあるのですけれども、そうしたときにはやっぱり私たち行政で幼稚園にしる、保育園にしる、こども園にしる、共通した中で一つの教育方針を持って今話題になっているようなことを子供たちに与えていくようなところが必要なのだろうなと思います。

最初に竹田委員さんからお話あった小学校で、やっぱりそういう幼稚園から育ってきた子の受け入れる体制づくりというお話もありましたけれども、それは当市では今スクラムということで取り組んでいまして、スタートカリキュラム的なものを小学校でも取り入れて、よく言われるのが幼稚園から小学校に来ると、小学校の先生が、あなたたちはもう今日から幼稚園生ではないよと。別の人間ですよという感じで、今までをもうきれいに捨てて、今日からスタートしますよとか。中学校になると、今度はあなたたちはもう小学生ではないのだからといって、今までを打ち消して新しくスタートさせるというのが今までだったようなのですけれども、このごろはそういうやり方ではなくて、今までを受け入れる。幼稚園ではどうしてきたの。そうやって頑張ってきたのだねと。では、小学校ではそういうところをまた一層伸ばしていこうねというようなやり方をとりつつあるものですから、まだ完全に今それが取り入れられているかどうかは言い切れませんが、流れとしては幼小の先生方、小中の先生方と交流を深めて、お互いにどういう教育をしているかということを理解して、子供たちを一つの流れの中で育てていこうというような形に今取り組んでいるところです。

あとは、先ほど増田部長さんからあった職員の関係のことは、なかなか難しいことだなと思っています。若い職員が多いものですから、その職員たちにどういうふうに、やっぱり子供を育ててもらうこともそうですし、保護者の方に寄り添ってもらうことも必要ですし、そのあたりご自分に経験のない方が多いものですから、そのところはいろんな研修等で磨いていってもらわなければならないと思うのですけれども、そこは1つ当市が抱えている今の課題だなと思っています。

私からは以上です。

○司会 ありがとうございます。

(2) 平成30年度全国学力学習状況調査について

○司会 それでは、次の議題に移らせていただきたいと思います。

2番目ですけれども、平成30年度全国学力学習状況調査についてということであります。長谷川学校教育課長より、お手元のこの教育会議というカラー刷りの資料に基づいて説明ございますので、よろしくお願いします。

課長、お願いいたします。

○学校教育課長（長谷川延明） よろしく申し上げます。ぜひプレゼンを準備しましたので、こちらを見ていただきながら進めていければうれしいなと思います。

では、お願いします。まず、学力学習状況調査の教科の関係の結果になります。本市の今年度の結果につきましては、小学校については全国平均よりも低いということで、4点ぐらい低いものがあったりとかという、そういうような状況になっています。中学校につきましては、ほぼ同じということで、国語についてはもう全く同じです。数学については、国語よりも若干低くなりますけれども、そんなに大変だという、そういう数値ではありません。理科についてもほぼ数学と同じような結果になりました。特に小学校の成績が、ここ数年余りよくないという議会の中でもそんな話がありましたけ

れども、実はそういったことがあります、これはうちの市の授業がまだまだちょっと改善に至っていないのではないかというような、そんな感じがします。

例えば、もうこれは10年前ですけれども、3年くらい前もこういうような問題はあったのですが、ひたすら漢字を正しく読んだり書いたりする力、これはもう皆さんがテストを受けたときと同じような問題です。ところが、今回こういった問題はなくなって、これが一番簡単な問題というか、一番最初に出ていますけれども、ノートの一部というのは左側に書いてありますけれども、その下線部と同じ漢字はどれか、1から3の中から選びましょうという、そういうふうな問題です。本市の正解率は、国が51.4に対して45.5、6ポイント開くというのは、やっぱりかなり心配をしなければならないという、そういうものになります。

ここの積極的と同じ「せき」はどれかという、そういったことが答えはこれになりますけれども、文脈の中で漢字を正しく選んで使う力、ただ単に漢字を暗記してノート1ページをやればいいという問題ではなくて、話をしたりとか、本を読んだりとか、そういうことを繰り返す中で身につけていく、そういう力が求められています。

本市は算数、もっと弱いですが、算数はこういう問題のときには点数が全国平均よりも上だったのです。小学校はよかったのです。ところが、ここ最近、こういった正しく計算して答えを出す力は身につけているところでしたけれども、今年の問題は、一番最初の問題はこういう問題です。答えが12割る0.8の式で求められる問題を下の1から4までのの中から全て選んでその番号を書きましょう。この問題は、国が39.9%の正答率なのに、本市は33.6。やっぱり6ポイント以上差が出ています。これは除法の計算の意味を理解し、活用する力ということで、12割る0.8という式がどういう状況の中で使われるものであるのかと、そういうところが求められているのかなと、そんなふうに思っています。

国語については、先ほど低いと言いましたが、分布を見ると若干5問できた子が何%という、そういう意味です。ですから、12問できた子は6%の割合です。ということで、おおむね県と全国平均と悪いなりに、それでも分布は正規分布に近いかなということが言えますが、先ほど弱いと言った算数なのですが、こういう状況になっています。恐ろしく下位の子たちが多くて、トップの子たちも少ない。

では、これをいつも直すにはどうしたらいいかというと、前まではドリルをやればいいのかと。どんどん、どんどんドリルをこなしていけば、そういった子たちができるようになるのではないかと前はなっていたのですが、今度問題が変わってきていますので、そういう授業をやっているとはいけないと。これよりもさらに応用力が求められるB問題は、図には表していませんけれども、もっともって顕著に表れています。B問題については、深刻な状況になっています。ですので、私たちはこれからもう繰り返し計算を解いたり、漢字を解く、そういったことはA Iの発達によって役に立たなくなる。これはこれからの日本の教育が言っていることです。だから、ただ計算方法を覚えて答えを出したりとか、ただ漢字を覚えて書けるようにするのではなくて、やっぱり意味を理解して活用する力、さまざまなことに活用できる汎用的な能力、応用力を身につけられる授業づくりをしていくということを本市では取り組まなければならないなと思っています。

具体的にやり方ですけれども、今までについては、これは今でも同じような問題があります。リョウが50メートル8秒、カズコが50メートル10秒、サトルが54メートル12秒、リンが60メートル12秒、誰が一番速いですかという。今まではこういう問題が出ると、先生が道のり割る時間をやれば速さが求められますよと言って、ああ、そうかと言って、わかる人と言ったらどんどん、どんどん手を挙げさせて授業をやっている、ん？とかって言って疑問が出ると、先生がこれっていうのは1秒当たりの進んだ道のりのことだよとかというふうに教えてあげるとい、そういう授業をやりながら、それならリョウさんが一番速いねとかってというような、速さの計算のやり方を覚える授業。公式を当てはめてやる授業というのをやっていたのだけれども、これではやっぱりいけないということで、今うちの市が取り組もうと思っていることと、全国もそうですけれども、こういう問題が出たらどうすれば比

べられるかなと子供たちに問いて、子供たちが主体的に考える。そして、こんなふうなことが考えられるよということをそれぞれ出し合う。自分が今まで計算してきた力であるとか、経験を生かした発言をどんどん、どんどんつなげていき合わせながら、そこに先生がかかわって、1秒当たりのリョウにそろえれば比べられるのだねというようなところを最終的に子供たちから導き出したりとか、教員がコーディネートをしていく。今までは教員が指名して、はい、これは正解です。だから、こうですねと進めていたのを、子供たち自身が納得、実感の上にやっていく、そういう意味を理解して汎用的な能力の獲得をしていくという、そういう授業を目指そうと考えております。

ですので、議題1については、そういうような身につける授業づくりについて、今日の皆さんからご意見を伺いたいなということが1点です。

2点目、今度は質問紙です。先ほどから話題になっていた「早寝早起き朝ご飯」に関係することですけれども、本市の朝食を毎日食べてくる子供たちというのは、全国平均よりも常に上回ってきました。29年度からコミュニティスクール運営協議会でも言っていまして、今年若干上がってうれしかったなと思うのですが、何でこれを始めたかというのは、去年の御中と浜中の3年生がこの結果を比べるときに、毎日朝食を食べている子というのと何にも食べていないという子では、平均点が明らかに違ったのです。物すごく。国語だったら十二、三点、数学だったら同じような感じで、食べてくる子と食べてこない子というのはこんな差があるということで、これは何とかしなければならないねといって、朝御飯についてはやったのですが、一番多かったのは毎日同じぐらいの時間に起きていますかという御中生と浜中生の結果はもっと差が開いていて、数学Bについてはもう30点くらいですか、30点くらいの差がついてしまうということで、この「早寝早起き朝ご飯」というのはかなり重要であるなということと、寝ている時間についても全く同じことが言えるということで、朝御飯をきちんと食べるようにしていくと、早寝と早起きということにもつながって、いい結果につながっていくのではないかとということで始めました。

これも一つは心配なものですけれども、読書をするということ、新聞を読むという数値については、本市は余り高くありません。全国的に新聞を読む家庭は少なくなっているという中でも、うちの市は低いですし、御前崎中学校は新聞を1週間に1回読むような時間を設けていますけれども、それでもまだ低いという、そういうようなあらわれが出ています。

もう一つやっぱり気がかりなのが、放課後に家でテレビやビデオ、テレビゲーム、インターネットをして過ごすことが多いという子については、全国平均よりも5ポイント上、10ポイント以上上。これが下がっているものだから、すごくいいように思われるかもしれませんが。これも中学校同じくらい、これ週末ですけれども、小学校は下がっていると言っていいように思うかもしれませんが、本市の子供が減ったのではなくて、全国的に増えている。小学校が29年度は72.6%であったのが、30年は81.1%、中学校は68.8%が77.3%って、かなり10ポイントずつ増えているのだけれども、本市の子供はそれ以上増えているという、そういうことです。

これも同じようなことが言えるのですけれども、両方ともこれも10ポイントぐらい上がっているのですけれども、10ポイント全国上がったのだけれども、もっと中学校は増えているという、そういう状況になっています。ですので、議題の2つ目としては、「早寝早起き朝ご飯」の推進により規則正しい生活習慣を身につけ、子供たちの力を最大限発揮できるようにすること、それをやることによって基本的生活習慣が確立され、読書の時間であるとか、ゲームの時間が減っていくのではないかと、そういうように考えています。

ですので、この2つの議題について今日お話をさせていただければうれしいなと、そんなふうに思います。よろしくお願いします。

○司会 それでは、今長谷川課長から説明がありましたけれども、最初に議題の1、汎用的な能力を身につけられる授業づくりということを議題にしてご意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

○教育委員（竹田和世） その前によろしいですか。

○司会 はい。

○教育委員（竹田和世） 要するにデータの信憑性というか、これ数日前の静岡新聞だったのですが、この学テについて小中の44%ぐらいで、そのテスト対策をしている、過去問をしているとかというのがあったのですよ。そうすると、要するにそのテスト対策をしている学校とそうでない学校の点数の差とか、だからそのデータとしてどのくらいの、こういうことがあるとどうなってくるのかなというのがすごく疑問です。数字としてどの程度の信憑性というか、御前崎市の学校はテスト対策というのはしていないのですか。

○学校教育課長（長谷川延明） 全くしていないということはないと思います。

○教育委員（竹田和世） 何かプリントを渡してくれてとかというのを聞いたことがあって。

○学校教育課長（長谷川延明） 県自体がそういった問題をやってから臨むような、そういうような方向性でチア・アップシートというのを県の総合教育センターで作って、それを子供たちにやらせなさいという、そういう方向で来ておりますので、どの学校でも似たような問題については対応しています。

○教育委員（竹田和世） では、どの学校でも同じように対応しているから、結果としては信頼できるでしょうということなのですか。

○学校教育課長（長谷川延明） 信頼できる数字だと思っています。

○教育委員（竹田和世） はい、わかりました。

○司会 どうでしょうか。

吉村先生、どうですか。

○教育委員（吉村 勝） 資料で議題の第1ということいろいろ。何でもそうだけれども、今は学習指導要領で言われているのが、主体的に対話的で深い学びということを言われているでしょう。そのことを考えていくと、やっぱり先ほど出た非認知能力の問題が出てくると思うのだよね。小さいときからそういう成功体験とか、あるいは工夫をしていくことだとか、あるいはそういうことに興味関心を持つだとか、そういう体験を積み重ねていると、こういうような難しい問題に当たって、対話的に子供たちでどうしたらいいだろうとか、こういう人ならどうだろうとか、そういうような対話的で非常に広い意見を求めながら、自分で判断していく力というか、そういうのをできてくるのではないかなと思うのだけれども。そこをさっき出たように、幼児教育と小学校教育の連携をもっと強くしてやっていくことも一つの手だと思う。直接的にこれをやればこうなるよということとはちょっとないのではないかなと。ただ、教師が常にそういう意識を持って教壇に立っているかどうかということがとても大事です。どうしても教師は、学習指導要領があるから、それをその学年でこなさなくてはならないという頭があるから、前へ進んでいかないと授業が遅れてしまうという、そういうようなこともあると思うのです。そうすると、どうしても結論をやっぱり教師が言ってしまうというか、そういうところもあるのではないかな。

だから、そういう学習指導要領の中でもポイント、ポイントを押さえた指導力というか、そういうことも求められてくると思います。単元構想というか、ここはうんと時間をかけよう、ここはもう軽くいこうとかという、そういうところが見えてくるといいのだけれども。

○教育委員（竹田和世） 今学校の先生の多忙化ということがすごく言われているではないですか。その授業づくりというところにフォーカスしたときに、そのベクトルが、先生のその多忙化というところと授業づくりをちゃんとしていこうというところのベクトルがうまく向いていけるのかなとか、先生たちがそういう時間も上手に作っていけるのかなと。ある程度の授業の組み立てしていくときに、子供たちのこの声を拾って行って、こういうふうに作っていくという、それが先生たちのすごくお忙しい中での授業づくりというのがますます大変というか、難しいなって。

○市長（柳澤重夫） こういう問題がずっと脈々と続いているでしょう、学力の問題は。今年始まったことではないのだよね。ずっとこういう問題で先生方も、またこういった教育委員会も頭を悩ませている大きな問題なのです。どこでこれを完成していくのかという、こういう小学校、中学校、教育

現場だけでこれが改善できるのかということも言える。だから、さっき吉村さんが言われたように、学習意欲であるとか、労働意欲であるとか、そういった忍耐力だとか、そういった全ての能力、こういったものを認知能力の中で、小さいときに植えつけていけば、自ずとそういう学年においてもそういった意欲というかな、意欲を持たせることだから。幼稚園、保育園のときに認知能力はそういう意欲を持たせるためのものだから、そういった意味では先生方も多少は楽になるのではないかと思います。

○経営戦略監（宮崎隆昭） この教員の教育力といったときに、他のどこの地域でもそうなのですが、教えるのが上手な先生という方がいらっしやって、実績で学力が伸びたよという先生がいらっしやるようでしたら、本当市内の教員が結構多忙化しているので、何とも言えないのですが、その授業風景、授業方法を相互で学び合うという場面はやっぱり欲しいのかなと。教え上手な先生ってやっぱりいまして、その方に学ぶというところ。あとは、最近はＩＴ系の機器が入り始めていますので、先生の多忙化の一つの中で、学習教材を作るのが結構大変なのですよね。そこをある程度その教え上手な先生が使っているような教材をうまく汎用型で使えるような方法があると、非常にいいのかなと。

学校評議員をやっているときも、先生によっては板書を全くやらない先生と板書と教材をうまく使っている先生と教材を全く使わない先生がいる中で、やっぱりバランスよく使っている先生の授業というのが聞いていても見ても生徒が引き込まれていたのも、非常におもしろいなど。教え方が上手だなというところがあります。

ですので、そういう教え方が上手な教員をどれだけ増やすのかというのが多分一番大きなものになってきますので、そのノウハウをどういう形で共有化できるのかということが大きな対策の一つになるのかなと。

ただ、学力そのもの自体は地域性もありまして、私学があるような都市部ですと、優秀な子が集まってくるので、引っ張り上げます。地方ですと、外国人の方が多いと、やっぱり若干日本語のレベルから教え込まなければならぬので、追いつかないというところがあるので、これは何とも言えない。ここの地域の特性、こちらの西部地域、特に外国人の方が多いので、まずは日本語を理解した上から入ってくるケースがあるので、どうしても落ちてしまうときがあります。そこをどうやってカバーしていくのかというところでいいますと、教育の中でそういうこと、子供たちに対して対応というところも一つ、菊川も多いのですけれども、そういったところの対応が一つ課題として。この全国的な結果の中ではかなり大きなウェイトを占めているのかなという気はします。

○司会 ほかはどうでしょうか。

○教育委員（島田恵美） 算数とか数学というのは、本当に一つの答えが必ず出ること、小さなこの成功体験。先ほど吉村先生が言ってくださったみたいに、本当にちょっとずつの積み重ねなのですけれども、この成功体験がすごく大事なことだと思うのです。やっぱり指導の上手な先生って、すごく褒めていると思うのですよ。子供を。基本的なことだと思うのですけれども、そういうできたねというこの積み重ねが大事で、つながっていくのではないかなと思います。本当に幼児教育とつながっているというか、小さな子って大事なことは読書とおしゃべりだとよく言われるのですけれども、本当に小さいときは字が読めないときから、お母さんとか先生たちが本を読んであげること、本を読むことを楽しんで、それから字に興味を持って、自分で読むようにと発展していくのですけれども、なかなか小学校で読書離れとかというのがやっぱりその小さなときの経験が少ないから、今そうなのではないかなとすごく思いました。

○司会 ほかに。

教育長。

○教育長（河原崎 全） ちょっとこれを議題にして話し合いづらかったかなということを今反省しているのですけれども、さっき吉村委員がお話になったように、解決策というのはないし、非常に難しいなと思いました。やっぱり今は学校の先生方に、今も研究指定校等になっているものですから、そういう中で第一小が文科省の研究指定校になって進めていますので、そういうところを中心に先生

方で研修会等を進めていただくことが、今やっていることですし、第一歩なのかなと思います。

ただ、授業等は私たちが学校へ訪問してみると、やっぱり自分たちが子供のころの授業とは随分変わったなということは実感をしました。それもある一つの学校だけではなくて、市内の小中全部見ても、同じような形で子供たちの話し合いを中心に進めていく形になっているものですから、あとはそのこのところをどう精度を高めていくかということと、あと定着なのかなと思っています。形としては今できつつあるので、あとはそこからどう定着させて、実力をうまく持っていくかというところが、また次の段階のポイントかなと思っていますので、やり方としては今、私が言うてはいけないかもしれませんが、間違っていないのではないかなと思っています。

○司会 皆さんから今議題に対して意見をいただきましたけれども、それを聞いて学校教育課長は。

○学校教育課長（長谷川延明） ちなみにいろんな質問の要旨があるのですが、うちは教育委員会と学校組合で御中と浜中で分かれてしまっているのですが、個々の数値は出さないというふうなことがあります。ただ「先生はあなたのよいところを褒めてくれますか。認めてくれますか」という質問に対して、浜中生は「当てはまる」と断言した子が40%、全国は32%、「どちらかといえば当てはまる」という子供たちを含めると、浜中生は88%、全国では82%ということで、学校の先生方はかなり認めているなど。これは小学校も同じです。今鳴門教育大の久我教授が小中学校に入ってボイスシャワーを浴びせましょうということでやっていますので、そういうような継続した取り組みが顕著に出てきたものかなと、そんなふうに思っています。

授業についても、先ほどですけれども、第一小学校の増田校長から電話が入って、静岡市の教育講演会に10年間うちに上智大学の奈須教授が入って、授業改善に取り組んでいますが、その静岡市のところで御前崎市の授業はこの10年間で画期的に変わっているよと。それは授業をとにかく良くしていこうというような思いを持って取り組んでいるからだよということで、そういうふうにして県内でうちの市の名前を挙げて言ってくれていますので、奈須教授は新しい学習指導要領を作っている人ですので、今から目指す授業については間違いはないのかなと思うのですが、ただやはり現場の教員には自分がかつて経験したことのない授業をやっていくということでの不安感は、当然あります。ですので、そういったのを払拭するようなことで、先ほど戦略監のようなお話でいろいろ交流をとにかく進めていきながら力を持った先生も本市にいますので、そういった力のある方がやっぱり組織として授業力を高めていくというような、そんな方向でとにかくやっていければなという、そういうふうに思います。以上です。

○司会 ありがとうございます。

それでは、議題2ですけれども。

○教育委員（吉村 勝） ちょっといい。このことと、もう一つ子供自身に主体的な学習の習慣をつけるというか、簡単に言うと家庭学習というか、そういうようなところをもう少し高めていけば、授業も恐らく変わってくるだろうと思うのだけれども、先生が早急に答えを言わなくても子供同士で意見交換をしながら進めていける、対話的な深みのある授業になっていくのではないかなと思うのだけれども、そこが何かちょっとうちはまだ浅いのではないかなという気がするのだけれども、それは具体的に数値で表すものを持っていないものであれなのだけれども、感じとして授業参観で回ったときなんか、若干そういうようなことを感じました。

○市長（柳澤重夫） たびたび言って申しわけないのですが、今先生が言ったように、先生というのは子供に対する情熱、授業の情熱、その先生の情熱が子供に伝わって、それが子供たちが先生を信頼する、尊敬する、そういったものにつながっていると思う。そういった信頼関係とか、生徒から信頼されるというか、そういった情熱を持った先生の授業がきつとうまいくと思うのだ。だから、そういう情熱を持った先生になってもらいたいね。先生方には。

難しいね。だから、私も一番思うのは、私らも教育はかぶってないけれども、ただ実際に社会人になったときに、その先生方が思う今の現在の教育、これが実際に今の社会に対して、例えば会社をやっている社長さんがいるではないですか。企業が雇用する。学生を雇用するのは、その社長さん方の

その学生観というか、そういったものとマッチングしているのか、この学習が。今企業が求めているのはどんな人材なのか。一生懸命やっているではないですか、先生方がこうして。これが卒業したときに、本当に今のこれからの実社会の企業が求めている人材、それとマッチングしているのか。そこから辺も、ただ学習指導要領に基づいて卒業させればいいというのではなくて、それを社会にマッチングしているような人を作っているのがこれからの人間づくりだと思うので、教育の。そうすると、私そんなことも思いながら、昨日もタウンミーティングでA I のことも言われたけれども、それももちろんそうだけれども、そういうところ含めて勉強してほしいなと思うのだけれども、私は。とにかく社会に通用する人間だから、私らは。それなりの忍耐力であるとかがマッチした、学習能力だけではなくて、人間味を持った人を作してほしい。

○司会 今市長が言ったような、社会を生き抜く力ですか、そういったものの今回もまた議題の2番目の規則正しい生活習慣を身につけると、そういったところが先ほどの幼児教育のところでも話がありましたけれども、まずここから社会規範であるとか、そういったものがここから身につけていくものというようなことだと思いますけれども、この議題の2の規則正しい生活習慣を身につけ、子供たちが力を最大限発揮できるようにすることを目指すということにつきまして、これについてはさっき議題1のときもお話ありましたけれども、改めてまたご意見いただければと思いますので、よろしくお願いします。

これについて、先ほど皆さんからいろいろご意見いただきましたので、いいということですか。

○教育長（河原崎 全） 7月の終わりの教育新聞の記事なのですが、学力学習状況調査の結果についてなのですが、保護者の中で経済的に低いという保護者の中で学力調査で高い正答率を示した児童生徒に、どういう教育をしているかということでした調査があるのですが、毎日朝食を食べさせている、本や新聞を読むように勧めている、子供が小さいころ絵本の読み聞かせをした、計画的に勉強するよう促している、PTA活動や保護者会などによく参加をしたと、そういうお宅は経済的にそれほど楽ではなくても、結果的に子供がそこそこの点数をとったと。また、その子供のことを調べてみると、今日ずっと話題になっている物事を最後までやり遂げる姿勢や異なる考えを持つ他者とのコミュニケーション能力といった非認知スキルが高い傾向にあったということが記事として出ています。

あと、私としては個人的にはずっと気になっていて、タウンミーティングのときにも必ず言って、その前の青少年健全育成の地区の会合のときも言ったのですが、やっぱりこの頃個人的に非常に気になるのがスマホ依存とかネット依存の件が気になっています。

6月20日前後ですが、WHOが病気として認定したということで新聞で大きく扱われるようになりましたけれども、今まではネットとかスマホというと犯罪に巻き込まれるから危ないというような言い方が強かったのですが、もうそれ以上に依存症になってしまうと。脳が破壊されてしまうというような心配が恐れ始めています。

そういう点でもやっぱり今日話題になっている「早寝早起き朝ご飯」とかで自分の時間を自分で管理する、コントロールする力をつけるとか、読書とか、幼いころからの読み聞かせになりますけれども、そうしたことで心の教育をしていく。スマホをシャットアウトするということはもう今の時代では無理ですから、それはあっても仕方がないし、活用すべきだと思いますけれども、その一方で大事なものであると思うものですから、そちらを教育の面で育てていくことが大事なのかなと私は思っていますし、そのためにも「早寝早起き朝ご飯」とか、こういう基本的な生活習慣というのは大事だなと思います。

○司会 わかりました。

協議1、2についてご意見いただきましたけれども、全体を通して皆様方から何か協議、これ以外でも結構でございますけれども、ご意見ありましたらお願いをします。

○教育委員（竹田和世） 質問ですが、私が子育てしたころは、幼稚園ではPTA会長がいて、家庭教育学級長というのがいて、家庭教育学級というのをやっていたのですが、今はないので

すか。

○学校教育課長（長谷川延明） やっています。

○教育委員（竹田和世） やっているのですね。ああ、そうか。私、先ほど副市長さんが、要するにひとり親家庭が多いというのもすごく問題ではないかというのをちらっと言われたのですが、それをすごく実感しているのです。

今の若いお母さんたち、瞬間瞬間で幸せを追っているというか、瞬間瞬間の楽を追っているというか、すごくそれを感じてしまうのです。私なんかひとり親ってわかると、こっちが気を遣うけれども、子供は平気で、今日何とかちゃんのおうち、ずっと行っているから平気とか、何とかちゃんのお母さんがお迎えに来てくれるから平気とか、もうそこら辺の助け合いといえれば助け合いですけども、でも夜の時間もそのお宅にいたりとか、そういうのってどうなのだろうと思うことがすごくあって、そういうのが入り込むという機関というのはないではないですか。だからすぐ親業みたいなことができるその家庭教育学級が、昔そういえばあったなみたいに思ったのですが、若いお母さんたちのそういう何か学べるところがあるといいなとすごく思いました。

○教育委員（吉村 勝） さっきから出ている家庭の教育環境というか、やっぱり親が新聞を読んでいる姿を見せたり、本を読んでいる姿を見ると、それは意識的な教育ではなくて、無意識的な教育なのですね。そういう姿が家庭の中にあれば、やっぱり子供はそういうように育っていくと思うのです。

さっき家庭学習をもう少しやるような手だてというか、そういうことも研究してみたらというようなことを言ったのだけでも、そうすればスマホの問題も若干は解消になるのかもしれませんが。全部家庭に責任をかぶせるということではなくて、乳幼児の段階はそのままとても大事だと。

○経営戦略監（宮崎隆昭） 私も一点。県の教育委員会にいたときに、親学という話をよくしたのです。家庭の教育力を上げましょうねと、親がこうやりましょうと講座を開くのですが、結局教育熱心な親しか来なくて、聞いてもらいたい親が来ないというのが、ここがいつもどうしたらいいのだろうと行政が最後詰まってしまうところなのです。どんなにいい政策を行政が打とうとしても、一番届けたい方が参加してくれないというこの非常に悲しい状況がいつもあって、これってずっと永遠の課題であるのですが、伝えたい人にどうやって伝えられるのかという。ここは行政手腕なのかと最近思うのですが、意外と一番大きな課題というのは、取り組み方法とかやり方はどうも吉村先生が言うとおり、家庭でこうあってほしいというのは伝えたいのですが、それが一番伝えたい方に伝わらないというのが昔からの悩みでした。今もそうです。

○副市長（鴨川 朗） それに関連していますけれども、例えばここで言う生活習慣が規則正しく生活している方のほうが成績がいいですよという統計的なもの、こういったものは何かご家庭にお知らせするような機会なんてあるのでしょうか。

○学校教育課長（長谷川延明） 全園の保護者、全小中の保護者に今年のPTA総会のときにPTA会長に説明してもらって行いましたが、やっぱりその会に来ない方がいますので、今回は市のメールと同じように、災害対策本部立ち上げとかいろいろなときにメール送信をして、今こういう状況ですと、今からどうしますとかという、そういうメールを学校に入れましたので、「朝御飯を昨日、今日と食べさせましたか」という調査を全部に流します。返信をしてもらいます。誰が返信をしてこなかったかというのを調べます。

○司会 ありがとうございます。皆さんからいろいろ貴重なご意見いただきました。先ほど戦略監が言った、聞いてもらいたい人に届かないというのは、去年、たしか自分がここの場にいたときに、何か同じような話をしたかなということで、ずっと永遠の課題だなと思っています。

皆さんいろいろご意見いただいた中で、またこの「スクラム御前崎」というものが御前崎市は大変これをもとにされていますけれども、そういったこともこの中に入っているかと思しますので、また一層これについて推進をしていきたいなと思っております。

○副市長（鴨川 朗） この間、7月に四国の四万十市に行ってきました、土佐山小学校というところ

ろに行ってきました。そこは、今言う小中一貫教育よりもっと進んでいまして、1年生から9年生まででした。ですので、もう全く同じ学校で1年生から9年生までというところがありました。もうモデル的な、その地区だけだと生徒数少ないからということで、外から希望があって入学するのですけれども、それも抽せんだそうです。すごく進んだ小中一貫教育がさらに進んでいる学校がありましたので、御前崎市も少しスクラムでやっているものですから、かなり進んでいますけれども、そんな事例もありましたので、何かあればホームページか何かで見られると思いますけれども。

○司会 ありがとうございます。

5 閉 会

○司会 それでは、以上をもちまして第1回の御前崎市総合教育会議を閉じさせていただきたいと思います。

それでは、互礼をもって終わりにしたいと思います。

(起 立)

○司会 相互に礼。

(相互に礼)

○司会 ありがとうございました。